

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	龍南思想史：論説
Author(s)	赤瀬，八代喜
Citation	龍南會雜誌， 1 3 7： 2 6 - 4 6
Issue date	1910-11-26
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5935
Right	

て、親しく強き印象を受ける事は出来なくなつた。然し、霧にむる山の牧場を、靜かに歸る羊の鈴は、尙「シンチエグエ、ゾルバツケン」の清き響きを傳へるだらう。クリスチアニア港頭に翻る國旗は、其樹立者の偉大な歴史を、長く旅人の耳に囁きたらう。(十月二十五日夜半脱稿)

龍 南 思 想 史

緒 論

赤 瀬 八 代 喜

國家の興亡個人の盛衰をが根底をなすものは、常に其國民及各自の思想如何に依るものである、偉大、堅實眞摯なる思想が横溢してゐる國家は駸々乎として一大進歩をなす、近時獨逸が新進國として英國を凌駕し世界の第一位を占めんとしてゐるのは、全く獨逸國民の思想が偉大、堅實で學術の應用を盛んにし勤勉であるからである。合衆國の獨立はどうして樹立せられた、自由を憧憬渴仰し平等を熱愛謳歌して十三州の心血が迸り、遂に彼等が劍を取り、戟を携へて戦ひ得た賜であつたではないか。ローマの文化燦然として起つたのは彼ローマの人民が剛健であつたからで、之を亡したのはこの氣風の衰頹にある。儒教がどうして數千年來東洋思想の有名なる一要素となり、唐宋の文化を齎し、乃至は我國忠君愛國の精神を培養するに力があつたか唯孔子が唱へた仁と云ふ精神に胚胎してゐるではないか、西洋思想の根本をなしてゐるものはギリシア文明と基督教とである、そして基督教は其本をクリストの愛の教に源を發してゐる、ルーズヴェルトは前亞米利加の大統領として其名四海に喧傳せるのみならず、實に彼は世界の偉人である。此高大なる人格を生じたの

は要するに彼が主張するストレニアスライフの産物である。

トルストイは世界の思想界の明星である、何故蘆花さんは遙々露西亞まで彼を訪問に往つたか、彼が著レザレクシヨンは何故拾何ヶ國語にまで翻譯されてゐるか、何故露西亞の政府は彼が様な虚無主義の人を獄に下すを恐れて敢て手を下すことが出来ないか、彼は成程露西亞の專制的政治の邪魔物厄介物かも知れないが、彼は人道の擁護者である、自己の主義に忠實である、新渡戸博士が現今青年憧憬の標的となつてゐるのは博士が武士道的精神の然らしむる所以である、即博士は貴顯權門の前と雖決して自己の主義を枉げぬ、何時であつたか學習院で盛んに貴族の攻撃をやつた、傍聴者は手に汗を握つてゐたが先生一向平氣であつたさうな、又如何に青年に對し同情があるか如何に苦き現代思潮の渦卷にはまつてゐる青年を救済せんとしつゝあるかは、博士が一高の校長でありながら實業の日本編輯顧問として自己の所信を披瀝し、赤心以て世道人心を啓蒙するに苦心をしてられるのを見ても明らかである、自分は中學にゐる頃先生に向つて自分のモットとする言を書いてもらつたことがある、其時博士は「正しくあれ而して恐るゝ勿れ」と古歌一首、「唐土のかなたの山に立つ雲はこゝに焼く火の煙なりけり」と記してやられた。博士は實に一介の書生に對しても此の如く眞面目で親切である、我龍南の思想は如何、剛毅朴訥は二十年來我校のモットであつた、創立以來明治三十五年頃までは、その隆盛時代で我校風の黄金時代とも云うべき時であつたが、三十七年頃よりこれにあきたらず思ふ徒が出来、現今に至るまで剛毅の氣は影をひそめ朴訥の風は地を拂ふて去つた。或者は剛毅朴訥は過去の形式だ、先輩の残した殘骸に過ぎぬ、内容の空虚な言とけなした、陳腐と侮つた、聲を大にして剛毅を呼び新入生歡迎の辭として朴訥を怒號しても、現代の青年には何等の力もない野人の呼びさして風馬

半に聞きなした。剛毅朴訥を唱導する者は色々新解釋を與へんとして「自覺の上に立てられたる剛毅朴訥」などへんでこなごまで云ひ出した者も出來た。

何故剛毅朴訥が陳腐であるか形式的であるか、自己てふ意識の明になれる現代青年の思想に何等の力を與へることが出來ぬか、要するに彼等は剛毅に就て潜心熟慮し、朴訥と云ふ意を深く研鑽しなかつたからであらう、又或は唯新奇を逐ふ輕佻なる青年に附和したのか、或無主義にかつがれた一部青年に雷同したのであらう。こう云ふ過つた思想が明治三十七年以來我龍南に勃起した、黒雲は暗膽として龍南の思想界にかぶつた、校風は不振思想は渾沌として統一する所を失ひ、學校と生徒との乖離甚しく、兩方の感情疏通せず、遂に幾多悲憤慷慨の士により革命の旗は上げられ、此に校風の一新機軸を出さんとしたが、龍南の思想界と雖も天下の大勢に抵抗して進むことは出來なかつた、滔々たる時代思潮の流れは飽くまで龍南の思潮を浸潤せずには止まなかつた、十九世紀より勃興せる科學萬能主義唯物主義の餘弊は、利己主義、虛無主義、人格無視の傾向、拜金の傾向を惹起し、現代人の特徴は懷疑と神經質とにありなど云ふ様になり、折角建設されんとした新校風もねじやんの悲運に陥つた。

又此圈外にあつた者でも、科學勃興の結果其態度が非常に自覺的となり、研鑽に次ぐに、又研鑽を以てした結果、プラグマチズムの哲學主義、平凡主義、新ローマンチックの倫理觀、文藝上の自然主義等雨後の筍も同様、西洋より輸入せられた思想界は紛糾錯亂して何處に統一するか分らぬ様であつた、且生活問題實際問題に頭をつきこんで考ふる様になつた、青年は一方では學課で鍛はれ、一方では將來の生活問題等を過慮して神經質となり、どうしても物事に熟事することの出來ない皮肉な、現實的な、殺風景な、見解を懷かしむる

様になつた。

今や我校風は萎靡し、思想は沈滞し、龍南一千の健兒に漲れる生々潑々の氣概がない、これ吾人が因るべき根底の思想を欠くからである。

遮莫吾人青年の特性は眞善美を憧憬し、直情徑行、權門に阿諛せず至誠眞實自己の主張を貫徹し、熱情の迸る所己れ一身の利害を顧みざる意氣にあり、そして剛毅朴訥とは皆此等を意味するではないか。

根本通明氏の論語講義には剛毅朴訥に就てこんな説明が興へてある、

「ドンな苦しい事が吾身に當つて來てもそれが爲めに屈する事なく物に負けない所が剛、事に當つて斷然物を決する所が毅、これで慾に惑はさるゝ所がない、それがために如何なる難儀に臨んでも猶豫する所がなく、何處までも毅を以て事を斷する、さうして誠を以て専らにするから飾りがない、朴と云ふは山から伐り出した木で飾りがないこと、訥と言ふは小人の様に惻口と云ふ方でない、言もなるべく控へ目にして成るべく言はうとして控へる、言の巧な所がない、小人は憚るところもなく間違うても口に於ては巧に利く行ひを顧みぬものであるから口に任せて言ふ所がある、君子はさうでない今言つた事が後に行はれぬ事があつてはドウと後の行ひを顧みるから言はうとして控へる、それが自ら仁に適ふ所がある」

剛毅朴訥近仁也「剛毅朴訥は手段である、其目的は最高の理想だ、此スピリットを發揮して最高限度に達せしめんがために、波瀾あり、叱咄あり、輿論あり、時代思潮が變遷するにつれて剛毅朴訥の内容も變つた、これを論するのが即ち龍南思想史である。

本 論

龍南の思想史を自分は三期に區別する。

校風隆興時代(自明治十二年至二十五年)

校風衰微時代(自二十六年至二十八年)

校風の過度時代(自二十九年)

一 校風隆興時代

抑も校風は何時樹立せられ、誰にまつて唱導せられたか、どうもはつきりしてゐない、唯に我校風のみならず總て精神現象の起りは何處の歴史を見ても臍の氣である、我武士道の源泉は何時か、賴朝が幕府を鎌倉に立てた時が確かに其一エボツクを作つてゐるが、意氣に感じ廉恥を重んじ、強をしひたげて、弱を助くる精神は、其以前より已に我國民思想の中に流れ／＼してゐたのである。

我校創立當時の校長野村先生は覺に剛毅朴訥の權化にあつたにちがひない、けれども先生の事業及思想創立時代、我先輩の意氣理想に就ては何等正確なる記事がないから查として窺ふことが出来ない、明治二十四年十二月二十六日龍南會雜誌が呱呱の聲を上ぐるに及んで我龍南の思想は始めて鎮西に其存在を認めらるゝ様になつた。當時學生の氣風は未だ幼稚の非難を免れずと云へ、天真瀾漫で冲天的氣概があつた、彼等は確平たる思想の上に立ちよく自信あり、力ある主張をなした、發行の主旨に曰く、
滔滔たる天下の志士が多く宇内の大勢に通せず、玄妙なる學理をも悟り得ず、自家沸騰的の腦漿に使喚せられ徒らに甲論乙駁紛々擾々として根底の力を失くす、
と曲學阿世の輩を痛罵し、唯徒らに煩惱の學究を事として、時代思潮の傾向を知らず、時勢後れの老耄學者

を痛罵せしその意氣の何ぞ未れ上れる。彼等諸君の言を聞くと、

「我等青年が専心勉學して人類の開化史上に文化を競ひ進んで東洋革新の基を開かん」と。我等青年の企圖する所は遠大である決して疎狂でない、其態度は飽くまで眞摯で彌次的でない、其時分の論說文苑雜報等は皆眞面目腐つたもので今白川鯉洋氏（時の衆郎氏）は論說に「勇敢と悟樂とを論じて信仰の功德に及ぶ」と云ふ題で勇敢も快樂も自己を信するが故に生じ来るものと斷言し信仰の力によりて人生を達觀し、悠々として信仰生活なすべし」と云ふ様な意を洩してある。當時龍南の健兒は敢て邊帽を飾らず天真流露を以て、男子の本懐とした、藤本充安君（今の秋田縣内務部長）第一號祝詞に其感懷を述べて曰く、

「萬事自由の空氣と、自然の競争に任せざるべからず、即ち文體も自由に放任し、思想も自由に放任せらるべし、若し夫れ體面とか高尚とかを唯其の本尊とし文藝の發達とか生徒の感情とか興味とかを屬事となすが如きことあるときは、即ち對外を主とし内實を客とするときは、遂に生徒の文出すに足らず」と

即ち彼等は自己衷心の切なる叫びをば、決して外聞とか浮世の紛々たる毀譽褒貶とかに怖ぢ恐れず暗へ葬つて沈黙すべからずと教へた、故に彼等は説々諤々意見を戦はし所信を吐露した、

第二號、白石君の論に

「苟も此錯雜極まる小理屈世界に生れて、左視右顧せば何れの時にか自己の決意を實行するを得ん、語を寄す我黨の快男子自家の信する所を斷行するに當つては、世間の毀譽何かあらん輿論の向背何かあらん、吾

人の進路は唯正路を踏んで直進する決心を取れ、」
 以てその時分の思潮の一二を窺ふに足る。

此の如き潑潑たる元氣を善く教導し其運用を誤らしめず益々隆盛の域に導いたのは、實に嘉納治五郎氏其人の人格の力である。

大凡物の現象が、旺盛となるには、必ずや其背後には偉大なる人格がある、我校風の振起にも先生の人格は非常の影響を及した。

此に先生は如何なる人であつたか少しく述べて見よう、

先生は勢力主義の人であつた、嚴格であつたが一方に於ては溢るゝ計りの慈愛を貯へてられた、今でも圖書館に掲げてある先生の温乎たる風采に接すれば漫ろに氏の人格が忍ばれる、先生は全力を傾注して教育に従事せられ、畢生の力を振うて我先輩諸君の薫陶の任に當られた、毎月第三日曜日に一切外出を禁じて生徒の二身上の相談に應せられた、生徒も先生を欽慕して居たためちつとも遠慮することもなく、學校の仕打に不平があれば之を述べ又は各自の要求を陳述し、一私人としての行動までも先生に謀つた、先生は實に慈愛に富める我校の友であつた、非をさとし正を推賞し少しも倦む所がなかつた、さればこそ先生と生徒との間の意志は善く疎通し、感情は融和し宛然一大家庭の如き有様であつたのだ、さるにても青天に霹靂一聲嘉納校長轉任の悲報は全校に喧傳せられた、生徒は先生の如き好教育家を放すに忍びず遂に「是れ何等の不幸ぞ吾人は全力を盡して其留任を請はざるを得ず」と絶叫したが生徒側の留任運動も無益、先生も再三留任を文部省に向つて請願せられたがこれも却下、遂に瑞邦館裏離別の會を開くことになつた、

其時に先生は告別の辭を述べて曰く

「我國進歩の有様を考ふるに、未だ列強諸國に及ばざること遠し、近頃或軍人の西比利亞を横斷して歸れるあり、彼を稱して大旅行家と云ふ、さる醫學士の獨逸に於て一發見をなせしあり、吾人彼を學界の麒麟兒となす、諸君よ今の世態は此の如くなるぞ、諸子は安閑として眠るべき時にあらざるぞ、恬として優遊すべきの時にあらず、熟考せよ如何ぞ勉めずして居らるべきや、勉めずば吾帝國を如何せん、勵まば吾國家を如何せん、(此に於て先生鐵拳を以て演壇を打つこと三度)吾人多く云はす男子は正に勉めよべし、勉めよや、勉めよや」と

瑞邦館内亦此の如き精氣漲りインスパイアされることがあらうか？生徒は感慨於く能はず先生の身邊を圍繞して、或者は過去の樂しき思出を語り、或は未來校風の發展を期し肝膽相照して時刻のうつるを覺わす、十二時に至るも一人の退席者なく二時に至り此くは際限なかるべし、とて遂に散會したと云ふことである。いつか一高の紀念會の夜に新渡戸博士が生徒より先生の職分に忠實でないことを攻撃せられて、辭表を懷にし中心をさらげ出して生徒に説かれた、喧々囂々先生非難の聲高かりしも、話頭進むにつれて滿場肅然中には感慨胸にあまつて泣き出した者もあつたと聞いた、場合こそ違へ、此二つの場合が妙に聯想される。校風の隆興に就て看過す可らざる、今一人の人は、即秋月韋軒先生である、初め先生の龍南の地に來らるゝ學生皆醇厚素朴にして、師に接するに形を以てせず心を以てし、慷慨志を談じて意氣凜然たるものあるを目て大に喜んで曰く「以て教ふべし」と、剛毅朴訥近仁也は論語の句だ、と教へられたのも實に先生其人である。先生は武士道の典型であつた教育勅語に詳細なる解釋を施して、全校生徒に教へられたのも先生其人である。

我校風は嘉納校長と秋月先生とに少くも培養せられた。韋軒先生は只に講壇に立つて漢文の字義の解釋をやつた計りでなく、能く九州人の短所を補ひ長所を發揮するに盡瘁せられた、先生は本が會津藩士であり、中々氣概にも富みでたられた、先生が生徒を訓育せられた話に次の如くある、
何時か演説會に於て諸子に告ぐるに志に従ひて情に従ふことなかりんことを以てしたり。蓋し人物の成る學藝の進むに此にありて存す、宜しく情に流るることなく其志を貫徹せんことを期せざるべからず。一旦奮然として志を立て遂に之を貫徹するは已素より之を欲する所にして、父兄の望む所亦實にこれに外ならず。決して青年の激情にほだされて一身を過ること勿れ、西郷、桐野、江藤、新平等、誠に情に於ては掬すべき所あれども遂に天道に悖り、一身の破滅を來しぬ、諸君は九州の洒落豪放なるに中國の優美敏活の東北の耐久緻密なるを調和せしむべし」と云ふ、
嘉納校長去り、秋月先生故山に歸休せられたが、我校風は既に堅固なる地盤の上に立てられた、また寧ろ抜く可らざるに至つたのである。

然るに一方我明治思想の變遷を尋ねて見ると、二十三年の前後は實に我國民思想の危機であつた、維新は起りて始めて外國と自由に交通する様になつた我國は、西洋諸國文明の程度の高きに驚歎の眼を見張つた、昔事西洋文物は之を取るべきと思ひ、我國固有の風俗習慣を顧みるに暇なく、萬事西洋に摸倣した、即歐化主義、西洋主義の盛んな時代で、其餘弊の極る所、盛んに舞踏などを奨勵して長夜の宴を張り外務大臣自ら率先して舞踏會を開き、又西洋風の假裝會は至る所に行はれ、甚しきは大學生は女學生に相混じて、英語にて患匿藏を演じたと云ふこともあつた。

西洋思想の輸入も明治初代より忙しかった、福澤氏は三田に慶應義塾を開きて功利主義を主張し、中村正喜氏は同人社を結びて同じく西洋の功利主義を基礎として、社會の教育に従事し、スワイル氏の「セルラベラ」を譯した。

基督教も歐化主義と共に漸次に布教せられ、熊本にはゼンス、横濱にブラウシ北海道にクラークありて愛の教を傳播した又出版に於ても、翻譯書は群をなしてあらはれた、即ちルーソーの民約説及萬事新誌、西洋英雄傳、西洋新書、立憲政体略等は其中の二三にすぎぬ。此の如く明治の思想界は漸く紛糾錯雜を極め歐化主義を謳歌せしに、我龍南に於ては未だ思想に大の影響を來さず、剛毅朴訥を標榜してゐたのは、一は嘉納校長と秋月先生のスバルタ的薰育と一は我校に集れる者の多く鎮西の健兒にして武骨綾々たるもの多數なりしによる。

當時學生の氣風は剛健を以て銀杏城下に鳴り響いてゐた、半夜斗酒を携へて立田の山神を驚かし、或は鬼面を被りて「トツテカモウ」とわざとだした如き、ありあまる其元氣の幣であつたらう。二十七年、八年は我國民が已に空理空論を止め、血と肉とを以て我實力を試験した時なのだ、六師團の將校士卒が嚟曉たる喇叭の音につれて雄姿凜々しく出征するのを目睹し、秋期旅行に於ては水雷の爆發操江號の廻覽をなし、校長よりは常に國家の大事を訓話せられ九連、鳳凰の戦勝、旅順海戦の勝報、ひきも切らざりし生きたる幾多の嚴肅なる事實は、我龍南の思想を一層強勁ならしめ、剛健に向はせ、摩張の風に驅りしとは疑がうべからざる事實である。戦後無形に多大の影響を蒙つた思想界に於ても、潮の寄せるが如くすさまじい勢を以て突進して來た

從來忠君愛國とか、國家とか云ふ觀念は理論上には、はつきりしてゐたが、未だ生命のある、堅固なものはなかつたが、戦争と云ふ實際問題に逢着して忠君愛國の念は益々其意義を明にし國家の觀念も深く頭に響く様になつた、そしてこれまで東洋の一島帝國として殆んど存在を知られてゐなかつた我國は、世界列強國から注目される様になつた、此時に至り我校風も自覺の境に入り、生徒各自も國民意識の明らかなるにつれ自己の價値に就ても深く考へる様になつたのである。

これまで學校全体の者が悠々歩武を一にして進んでゐたのが三十年頃から個人の權威が主張せられ、利己主義が勃興する様になつた、習學寮は勉強が出来ないとか、個性を無視するとか、寮則を以て個人の自由を束縛するとか、云ふ議論が首をもたげ、從て收容人員も減少する様になつた、秋期發火演習の如きにも事故を拵へて欠席する者が多く、六百人中二百三十人の欠行者を見るに至り、學校宛に來る生徒各自の信書の如き非常な亂雜を極めたと云ふことである、勢已に此の如し、道德の權威は漸く其力を失つた、一年間に放校の多かりしこと此年の様に多數上つたことは前にない、學校は其始末に困つて風紀取締を警察に頼んだ、學生は此處置に對して攻撃の矢を放つた、一部憂國の志士は龍南思想界の沈滯を慨き、雜誌部演說部の振興策を説き學寮の革新を囑々した。

三十二年に至り雜誌に於ては校風の琢磨に資せんがため風雲録を設け學生氣風の頽廢を挽回せんとした、紫洋君の學寮五分論も此時に顯れたのである。

龍南會は修養和親を目的として立られたのであつた、彼等は單に教場に於て先生よりは講義をきき御互の間にはマートの競争をやつて能事足れりとしてゐなかつた、彼等は互に一致和合して大いに我校の特色を發揮

し各自の人格を築き學生相互間の調和を謀らんとしたが、今や學校と龍南會とは相背離した、設立の當時には第五高等學校の學生は皆龍南會員で龍南會員は同時に五高生であつたが、此時に當つては成程校則には五高生全体が龍南會員であつたが、それは有名虛實龍南會は漸く各部委員の盡力により其命脉を保つ様な傾になつた、生徒は龍南會の存在を漸く忘れんとしてゐた、三十三年來地方團體の成立は夥しいもので何縣人會何々縣人會龍南は幾多の小割據の天地となつた。

龍南昔日の眞摯の態度蕩然として地を拂うて去れりと慨したが、それは校風の全盛時代に比較した話で、隨分見るに足るべき美譽もあつた、三十四年六月濟々疊に杉、中村の二氏が、學資に窮し牛乳を賣つて勉強してゐる、けなげな決心を聞いた寮生は、義捐金拾六圓、書冊三十冊を送つた、三十三年四月十六日中川校長第二高等學校に轉任せられて、櫻井房記氏其後をつがれた、櫻井校長は禁酒論者で其年の入學式に於て學生に禁酒をすゝめ、煙草もなるべく止める様にとの注意があつた、越えて三十四年度の入學式に於て宣誓書四ヶ條を設け其一項に禁酒の件を加へた。

三十五年に至り基督教の思想が具體的に現れる様になつた吉田修夫君は「人格的宗教とヒュマニチー」を議論し、其論據は皆純基督教の思想に土臺を置いてゐた、此に比べると今岡信一郎氏の宗教觀は吉田君の宗教觀よりも其見地が廣く、其信仰も自由であつた、兎角此兩君は極莊重な態度で自己の信仰を發表し極眞面目なる宗教觀を以て龍南の思想界を賑はした、又組合教會のオリソリチー海老名氏は此頃以來校して基督論に於て得意の雄辯を吐いた、龍南の思想は餘り其影響を受けなかつた様である。

二、校風衰微の時代

そのでは御座なく候ふ、夫れ消極的に人に過失なからしむるには探偵規則の如きは太に必要なるかも知れず併し進んで積極的に大なる人物を作らんとするには、こせ／＼した規則の如きもの程害ありて益なきものは御座なく候、たとへば吾人狭き室の中に密閉せらるゝ時は、身に危害の迫ること極めて稀なるも、吾人は或る一種の壓迫を感じ、毫も心を融々と伸すこと能はず候、去て曠野の中を馳する時、或は石に躓くことあるべく、或は陷牢中に陥ることなしとも限らざるも、此時吾人の意氣まさに旺盛直ちにかの斗牛をも衝かむ計りにて候、力山を抜き氣世を蓋ふ底の氣概は決して／＼こせ／＼した規則を以て縛せらるゝ青年に望むべからず候、近年學生の元氣次第に衰微するは教育者が一は末なる形式的規則を重んじ、根本なる精神教育を忘れたる弊にあらむかと存じ候、願はくは此言以つて五高の校長及舎監二先生の箴とならざらんとを。

即ち彼等は規則が自分を束縛するとか、學校の教育が形式的なつたと浩歎する様に、自己解放を要求した、つまり我龍南の思想界は非常に個人的色彩を帶ぶ様になつた、彼等の言に、
生れたり、故に吾人は活きざるべからず、四圍の境遇に左右せらるゝことなく、前面に突進せよ時勢の率
先者となれ

眞理は多數決にあらず、
個人の意識が強く感得される様になつたのは宜しいが、個性を重んずとの餘り校風を蔑視する様になつたのは悲しむべき現象である、奥舎監は生徒と意志の疎通を謀らなため日を約して寄宿舎に來り、大いに生徒の意向を聞き、寮風を發揚し、萎靡せる校風を振起せんとせられた。先生は理想的寄宿舎を建設せんとし、和

親を旨として家族的ならしめんと百方努力せられた、學寮に圖書室を設置して神的娛樂の料せられたの、先生の盡瘁になつたのである、然るに先生は留任四年にして病の故を以て辭任せられたのは惜むべきことであつた。

三十三三年頃から構牛熱が大分高くなつて來た、此時分にも彼が著書は愛讀せられ「美的生活論」などは隨喜の涙を以て讀まれた様である、三十七年の龍南にも狂人の欠乏として次の様に書いてある、

理想的黄金時代を憧憬しつゝ流星の如く此世を去りし彼れユーソーはあはれ一個の狂人なりき、革命を父とし、反動を母とし、大革命の餘波に立ちてよくナポレオン三世の野卑專制主義に反抗せし、彼れユーソーもあはれ一個の狂人なりき「神人間を造りしにあらす人間神を造りし也」を絶叫しつゝ力なき人類を嘲り、獨り超人の面影を夢みて、遂に悲慘の生涯に狂死せし彼れニツチエや亦實に好個の狂人なりしなり、あま妄りに理性を説く勿れ、考察を説く勿れ、理性と考察と之に活氣と情熱とを措きて、そも何事かをなしうるものぞ、然るに近時常理と形式と規矩と繩墨との外に人はまた人生の意義を見出すこと能はざるに至れり、あま人生のこと常理と繩墨と以外に説明すること能はざるか、吾れに不拔の信念と動力とあり、世の常理と規矩とそも何する者ぞや、

彼等は現實生活より逃れて理想の郷に遊ばんとしたのである、社會の要求を顧みず只天の要求に憧れ狂人の欠乏位を歎する様に血あり熱ある、ガイストリツヒな者は未だ語るに足れる輩であつた、目露戦争後風俗次第に壞亂し且自然主義がそろ／＼芽をふいて來た頃なので我校にも何等かの反動がなくては止まぬ。寮内夜靜かにして電燈の光暗き頃寢室内から洩れ出る聲は友情を語るにあらず、如何はしき痴話であつた、

武夫原に於ては他人の惡口に皮肉な論評を聞くのみで、昔の様に此處に五人一團となりて義事を談じて血を躍らし、横邪を憎んで切齒する様なことはなかつた、立田山は日頃彼等が逍遙の友で、或は霜白山氣冷かなる朝「休道多郷苦心多、同郷友有自相親、柴扉出曉霜如雪、君汲川流我拾薪」を高誦して曉の空氣を振はし、或は朗かなる秋會心の友相携へて「翻手作雲覆手雨、紛々輕薄何數用、君不見管鮑貧時交、此道今人棄如土」を放吟して秋天に嘯き、或は靜かに寂しく暮れ行く秋の夕金峯の彼方にうすれ行く夕燒雲を眺めながら、未來の理想を語り合つたのも昔のこと、今は多く肉屋で蕎麥屋で快を求める様になつた。

しかし又一方から考へて見るとこれまで剛毅朴訥と云へばごつ／＼したもので、敝衣破帽を以て得意としてたつた傾も見えたがこの時分から情緒を重んずる様になつた、三十七年十一月の雜誌で愚民子は「龍南の美的會合」と云ふ題で音樂會の設立を論じ、又次號に於て畫會の必要を説いた、然り剛毅朴訥は近仁と云ふのは、みやび心を排拆し、やさしい思を否定する様なそんな狭い難つ苦しいものでない、つまり我々の最善最善の理想郷であるから智情意等しくこれ必要である。

明年三十八年五月中堅會は生れた、彼等が「謹みて龍南の健兒に告ぐ」と公にした宣言書により如何にして起り如何なる目的を以て組織せられたかを紹介しよう、

中蔚然として晩翠をふくむと云ひけむ龍南の美風今や漸々頽廢の緒につかんとす今にして是が維持と振興とを謀るに非ずんば、校風のこと又云ふべからざるものあらむ、我等茲に思ふ所あり非淺慮自ら揣らず、之が救済の方法とし本會を組織し名けて中堅會と云ふ、と彼等は其綱領として三ヶ條を設けた

一、自己の修養に志すものに成り之に向て直進するを目的とす

二、先各自相互の感應を得必然龍南の美風の中堅たる可きことを期す

三、来るものは拒まず之に志すもの盡く來り投するは冀望にして所信たゞ、中堅會會員は斯様にして成つて、會員も勤直な者が多く、中には學業拔群者もあつた、發起人は、

吾妻 耕一 高田 保馬 久保田晴光 櫻井 時雄 陶山 哲夫 岡田三次郎
 谷 龍之助 高橋 信 栗林 綠 中山 豊 西山 徳助 小田 清

の諸氏で其設立は校友の注目をひいた、随分非難の聲も起つた、彼等は修養を目的としてはゐるが、所謂似而非修養者である、彼等を龍南に志士仁人なき者の様に傍若無人にも校風は蔑微せりなぞと大聲疾呼して救済の旗を上げた。又中堅會の諸員は龍南會の存在を無視した者である、我校には龍南會がある八百の健兒會長閣下の下に徳を磨き業を勵むで、程度の差こそあれ八百の會員皆等しく修養の功を積みつゝある、中にはたゞある種の方法によるの故を以て、自己のみ校の中堅たるを得居かの如く獨尊するは、これ我龍南會員を侮辱するものだ、會長閣下の不徳を公言する者だ、と攻撃した中には賛成の意を表する少數の人もあつたが、滔々たる大河の決潰は二三子の亦如何ともすことは出來ない、ウサダル中堅の、戰に於ては蓋世の英雄サボレオンも戰の運命を左右することは出來ず、遂にセントヘレナで頑癪の生涯を送るに至つた、中堅會の會員も決して熱情が足りなかつたのではない、結合が堅固でなかつたのではない、似而非修養家で

もない、彼等は衰勢を挽回せんと雄々しく奮闘したけれども、大勢の向ふ所遂に濁れる龍南の思潮を清めることが出来ず雄圖も空しく失敗に終つたが、其の耿々たる赤心に至つては、七生討逆賊を目的として湊川に戦死した楠公の精忠にも比すべきので、永く龍南の歴史に光彩を添へることであらう。龍南の士族を代表する明治三十七八年は我國民にとり忘られぬ年である。日露戦争は實に此間に起つた。日清戦争により漸く存在を認められ日英同盟により世界列強國の注意を惹いた我國は此の戦勝により一等國の仲間入りをした、國民は世界的の襟度をとるに至り、文學、美術政治實業の諸方面に於てすべて歐米諸國と密接の關係を有する様になつた、文壇にては翻譯物ばかりでなく出版せられた、佛蘭西物、露西亞物、殊にトルストイ、ツルゲネフ、アンドレーフ等の作は盛んに紹介せられ、ゾラ、イブセンの作物も多く愛讀せられた、政治の方面にてもポーツマスの條約以來は、ヘーグの万国平和會議、米國の日人排斥運動、さては歐米諸名士の來訪あり、國勢の膨脹駸々乎として暫くもやむ時がなかつた、で國民も茲に自覺して來た、眞面目となつた。我龍南の思想界にも此頃暗膽たる妖雲が蔽はれ、雨が風が容易に測知すべからざるものがあつた、三十九年十月に至り轉校事件により遂にこれまで鬱積せられたる沈滯物はこの空隙より凄じい勢を以て爆發した。

三、校風の過度時代

思想の沈滯、死せる平和も轉校事件に於て色めき立つて來た。此事件の起りは栗野昇太郎氏が五高より一高へ轉校したのが動機となつて、局面を開いたのである。從來高等學校は轉校を許されなかつたが、三十九年三月廿八日文部省令は特別法を發表し、次で栗野氏の轉校を許可した、生徒は文部省の所置に不服を唱へ、委員を撰んで該事件の真相を確めなため校長を訪はしめ、今回の轉校は若し三月二十八日の文部省令適用な

りとせば栗野氏に已むを得ぬ所謂重大の事故があつたか、事大使栗野愼一郎と其子とに關する故に重大なりしか、何故に校長は一度轉校の願書を却下しながら省令下るに及び之を許可せられしや、若し先生が不服なりしも文部の命令により自己の意志を枉げて文部省に盲従せられしとならば、其處置は大いに剛毅朴訥の精神に悖る、先生速に省令の撤回を文部省に請願せられよ、と、校長は文部省の令に盲従せるに非ず、始め却下せしは文書に特別の事故なかりしために許可せざりしなり、後之を許せしは事重大と見たために承諾を與へたりと、十月九日生徒は武夫原に於て大會を開き、生徒一般の意見を聞く、大川周明君の悲憤慷慨の演説も此日だと記憶する、翌日十日記念祭式後、校長は文部省と交渉のため上京の途に上り、二十日歸校せられた、文部省も一旦出した省令だもの唯それでは悪う御座いましたと直く撤回も出來かねる、結局來年の校長會議まで省令の適用は兩關係學校長に一任すること、以後あまり干渉がましきことはせぬと云ふことであつたから生徒もやつと安堵した。

此轉校事件は決して一時の好奇心が死せる平和にあき足らず、平地に波瀾を起さんがために慰み半分にやつたものでない、學校の尊嚴を傷けざらんがため剛毅朴訥の精神を何處々々までも明にせんがために起つたものであつた。

此事件に就て忘るべからざる人は大川周明(柏朗)氏である、君は山形の人、鎮西は剛健の風を以て名高く、中學在校の時分に五高出の人から教はつたことがあつて、龍南の美風を敬慕し笈を負ひて熊本の土地を踏んだが、もう其頃は校風も萎靡振はざる時代であつたので、遙かに古人の人格に接せんとし横井小楠先生の事に就ては研究も淺からず、大いに私淑してゐた、下敷回雜誌にも先生に對する感想を述べ、又先生の墓地

に遊んで先生的人格にタツチした事もあつた、又君は思想の人、信念の人でスビリチュアルライフを楽しみ、自然の大精神に融合せんとしてゐた、立田山は君が好個の友で、四十年發行の雜誌獨興一篇に於て次の如く云つて居る、

立田山は僕の庭園也、吾はかれによりて自然を戀し始めぬ、會遊の山川四明ヶ嶽も、月の瀬も、虹の松原も、開門が嶽も、未だこの戀を教へざりき、教へざりしは僕が戀する能はざりしによれり、戀せよさらば戀せられしと古人いみじく曰ひぬ、僕の眼球の閉ぢざる間、光線の照らす處、僕はこの戀する能はざらむ。

彼は龍南四周の自然を熱愛してゐた、それ程亦我五高を愛してゐた、校風を思慮するの餘り學校に對する不平もならべ、學校の惡風潮を攻撃もした、即ち彼は叟々錄に於て、校風管見に於て忌憚なく其の所信を打破した、校風管見に、

採点主義、形式主義が漸次生徒をして神經質ならしめ、その競争心(向上心と區別せよ)名譽心を刺戟し我利主義を養成し、頭腦は器械的となり自覺力を失ひ想像力を失ひ、氣骨を銷磨し、元氣を消滅し、天才を風化する、夫れ學問の味は生せしむる能はず、古の聖人は云ふ、知之者不如好之者好之者不如樂之者と、人生の意義は或意味に於て學を好むにあり、二十才三十才の間は古人が憤を發して、眠食を廢したる時代也、今日の學生は神經衰弱養生時代也、亦悲しからずや(中略)、哲學者は宇宙に尙神祕の世界あるを説き、神經質の風潮を撲滅せよ、宗教家は寂滅爲樂の深義を以て愛神愛人の福音を以て、我利實利の風潮を擊碎せよ、政治家は小成偷安の風潮と戰へ、文藝家は沒趣味の風潮と闘へ、哲學的、宗教的、藝術的會合を隆ならし

めよ、而して新娯樂室を建設せよ、咸々の風を遠く追へ、蕩々の氣を新に作れ。と櫻井校長は病の故を以て四十年一月辭任し、松浦校長其後を襲はれた、渡邊敦頭の退任は去れども遂はすかと云ふ様であつたが、高木、武藤、二教授の辭任には、生徒は一同に激聲を發した。四十年後の思想界は再び沈滞した、千變一律、自己内心の要求につけ、自己を欺かざれ、自己を樹立せよ、新しき地盤につけよとか相論じてゐる要するに龍南の思想界は段々個人的色彩をまして來るのは亦争ふべからざる事實である。

結 論

(略)

臥 虎 山 歌

(月性上人作)

臥虎山高宇宙間氣勢万仞不可攀。

下有繡虎文章鬱早被人間窺一斑。

維時文明稱多士屈指野巒山鹿耳。

麒麟不復出西効熊羆何人釣渭水。

駱駝大任更屬誰驥驥千里名空馳。

賣文貪錢皆豺狼曠言斯世盡狐狸。

山獺多淫丘貉睡拂々詔笑猩々醉。

不見仁讓果然群設道太平曾耳至。

牛頭桂卷人已過驢背作詩不掩瑕。

桂陽之大偽君子遼東之豕自大家。

詞壇猶憶策蹇屢失筆陣狼狼救無術。

文章或雖假虎皮破綻其奈羊質。

狗尾續貂列史官亦是沐猴而儒冠。

案頭詩書教鼠嚼貓與先生共素餐。

大風起兮繡虎怒一嘯吹折滿山樹。

嶺魅兮魑魅伏任君天下縱獨步。

嗚呼我亦作歌閤兔毫。

仰看虎山高又高。